

市民学コース ⑥ 富士見の歴史

古代から 現代までの「富士見市の街道」の歴史

## 第1回 総論—陸上交通と河川交通

期 日 平成30年6月9日（土）13時30分～15時30分

場 所 鶴瀬公民館

講 師 宮瀧交二氏（大東文化大学文学部教授）



平成30年度（第41期）の富士見の歴史講座が行われ、40名の受講生が勉強された。講師に大東文化大学文学部教授の「宮瀧交二氏」をお迎えし、古代から現代までの「富士見市の街道」の歴史をテーマに2時間の講義の中、古墳時代から現代まで郷土の街道の歴史を知る。富士見市は、川越と江戸との重要な輸送流通経路として存在してきた。今回は、時代別に視点を向けて追究してみる5回にわたる講座である。

第1回目とし「陸上交通と河川交通」についての講義内容であった。

埼玉県の時代別主要交通路（街道）を時代別に分けると、

- ・古代 入間路（いりまじり）東山道武蔵路と呼ぶ
- ・中世 「鎌倉街道」当時の名称は、上道・中道・下道など
- ・近世 中山道・日光街道・川越街道（草津道とも）

など

- ・近・現代 鉄道（高崎線・東北本線・東武東上線・西武鉄道・秩父鉄道

この他に、忘れてはならないのが、県内各地を流れる河川利用した河川交通であり、古墳時代には、石材・植輪の出土は、河川交通が重要な意味を持っていた。江戸の町を支える「台所」として、新河岸川の舟運は、江戸と



川越を結ぶ大動脈として活用された。

また、富士見市内には「鎌倉街道 上道」と「鎌倉街道 中道」をつなぐ「羽根倉道」と呼ばれる街道が存在した可能性が高い。

「鎌倉街道」研究の方法とし

- ・文献史的 ・歴史地理学的 ・考古学的のアプローチが！

○市民の皆さんにできること

- ・市民の手で現地調査（踏査）と記録化
- ・「鎌倉街道」研究から災害史研究へ

○新河岸川の舟運

・江戸時代から明治時代にかけて、新河岸川の舟運は経済的な大動脈であったが、大正3年（1914年）の東武東上線開通により、一気に鉄道に変わった。

・以前の新河岸川は蛇行しており、氾濫がたびたび起こり、直線的な河川に修復した。

○新河岸川を航行した舟、高瀬舟

- ・70～80石積み（1石は100升）米俵250～300俵を積載できた。

○舟の種類

- ・並船—浅草まで1往復、7日～20日（荷船）
- ・早船—客を運ぶ屋形船
- ・急船—1往復、3日～4日（荷船）
- ・飛切船—2日で1往復する特急便（人出もかかった）

○新座郡の商品作物

- ・当初は馬で川越街道を用いて江戸に出荷
- ・18世紀後半は、新河岸川の舟運を用いて江戸に出荷
- ・新座郡の特産物（大根・ごぼう・芋等）

○地元の歴史は、市民の手で明らかに！

- ・土地勘があり、生活実感のある人にしかわからない歴史的風土がある。
- ・時代を生き抜いた祖先たちの歴史を学ぶことに大きな意味がある。



